

# 2019 年度 IASPEI 関連国際学術大会渡航助成金

## 成果報告書

名古屋大学環境学研究科 博士後期課程 2 年 辻 修平

日本地震学会より海外渡航旅費の助成を受け、2019 年 7 月 11 日から 19 日にかけて カナダのモントリオールで行われた 27<sup>th</sup> IUGG General Assembly に参加しましたので、その成果を報告いたします。

IUGG は International Union of Geodesy and Geophysics の頭字語で、測地学と地球物理学に関する 7 つの国際学会の作る連合です。地震学会が所属する IASPEI との関係は、国内の学会でいえば、JpGU と地震学会の関係に相当します。そこからもわかるように今回参加させていただいた 27<sup>th</sup> IUGG General Assembly では、電磁気学や気象学なども含む様々な分野のセッションと共に、各分野間の合同セッションも開催されました。

私は、” Seismic Scattering, Ambient Noise, and Monitoring Earth's Structure ” というセッションにて、” Secular and Coseismic Changes in S-wave Velocity Detected Using ACROSS along the Nankai Trough Subduction Zone, Japan ” というタイトルで口頭発表を行いました。私の発表した内容は、人工震源装置を用いて精密な地震波伝播速度変化の観測を行い、これまで報告のなかった経年的な地震波伝播速度の変化を見つけたというものでした。3 分程度の Discussion の時間に 5 件の質問をいただいたことから、同様の研究をしている方々に研究を知って興味を持っていただくことができたと思います。特に、論文の中でしか見たことがなかった著名な研究者の方からも質問していただいたこと、セッション終了後に海外の研究者の方から情報交換のために声をかけていただいたことは、私にとってこの学会での何よりの経験でした。

加えて、私の専門分野である地震波を用いた地下構造のモニタリングやそれに関連する電磁探査などの隣接分野における最新の動向を知ることもできました。地震波を用いたモニタリングではデータの蓄積に伴って、これまでの既知の現象に伴う変化を検出するという戦略を卒業し、「通常時」の特性を踏まえて異常検知を行うような段階へと移り変わりつつあることを感じました。また、同じく構造を扱う電磁探査のセッションでは、構造推定のためのモデルシミュレーションに電磁探査の観測データ以外のデータを組み込んでより尤もらしい推定を行うデータ同化の手法を、容易に利用できるような解析手法が実用化され、利用され始めていることを知ることができました。このような他分野での進歩に気が付けたことも、IUGG という大きな国際学会に参加して得ることができた成果の一つだと思っています。

最後になりましたが、この度の渡航を助成していただいた日本地震学会および関係者の皆様にお礼申し上げます。手厚い支援をいただけたおかげで、余裕をもって発表に臨むことができ、また、専門分野以外の分野に関しても多くの講演を聞くこともできました。このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。